

春よこい

2008(平成20)年5月20日鑑賞〈東映試写室〉

★★★



監督＝三枝健起／原作・脚本＝中村努／脚本＝いながきよたか／出演＝工藤夕貴／西島秀俊／時任三郎／宇崎竜童／吹石一恵／高橋ひとみ／小清水一揮／犬塚弘（東映配給／2008年日本映画／108分）

……工藤夕貴が17年ぶりの主演で臨む人間ドラマのテーマは家族愛！ ある犯罪によって逃亡生活を送る夫は、今どこに……？ それをじっと待つ妻の苦悩は……？ 「父ちゃん、今年もまた会えたね」との記事の予想外の反響とその波紋は……？ 記者魂と刑事魂がぶつかり合う中、この家族にはさて、どんな春が……？

いいテーマだが、大きな欠点が……？

プレスシートによれば、この映画は「父ちゃん、今年もまた写真が出るね」というひと言がヒントになって誕生したとのこと。つまり、今年もまた交番前の掲示板に張り出された指名手配犯の写真を見て、9歳の息子が逃亡中の父親を思うシーンがこの映画のポイント。

時代は昭和50年代後半。舞台は佐賀県唐津市呼子町。4年前に誤って人を殺してしまった尾崎修治（時任三郎）をじっと待つのは、妻芳枝（工藤夕貴）と9歳の一人息子ツヨシ（小清水一揮）。芳枝は釣り船や魚市場の働きで生計を立てており、ツヨシには「父ちゃんは、おらっさんとよ。家族は、おまえと母ちゃんとじいちゃんの3人」と言い聞かせていた。しかし本心はそうではなく、修治の帰りを待ち続けていることは明らか！

このように、この映画のテーマはすごくいいのだが、私にはなぜ修治が4年間も逃亡生活を続けているのが不可解。だって、映画冒頭のシーンを観る限り、修治が借金を取り立てにきた男を死なせてしまったのは、男による強引な船の取りあげに抗議していた時、ちょっとした弾みで男を殺してしまったもの。しかも、男が先に修治に

対して暴力を振るっているし、修治に殺意などなかったことは明らかだから、修治の罪はせいぜい傷害致死罪、いい弁護士がつけば過失致死罪として、執行猶予がつく可能性大だから。

そんな修治がなぜ、4年間もずっと逃亡生活を送っているの？ 原作・脚本の中村努氏と脚本のいながききよたか氏が、どのように考えたのか知らないが、私にはこれが大きな欠点と思えるのだが……？

ジャーナリスト魂あれこれ……？

『ハンティング・パーティ』（07年）は、500万ドルの懸賞金がかけられた、ボスニア紛争におけるセルビア人指導者で戦争犯罪人のフォックスの居場所を突き止め、そのインタビューを狙うリチャード・ギア扮するものすごいジャーナリストが主人公。また『闇の子供たち』（08年）は、タイにおける人身売買と臓器移植問題を取材する江口洋介扮する新聞記者が主人公。そして『世界で一番美しい夜』（07年）は、日本の西の辺境にある要村に左遷された田口トモヲ扮する新聞記者がジャーナリスト魂を発揮して「出生率日本一」の謎を調べていくという奇想天外な映画だった。

これに対して、『春よこい』に登場する新聞記者岡本利夫（西島秀俊）は、父親の指名手配の写真に目を潤ませ、父親の頬に触れようと手を伸ばすツヨシの姿を望遠レンズで秘かにパチリ。そんな彼のジャーナリスト魂は……？

記事の反響は？

その写真は「父ちゃん、今年もまた会えたね」という見出しの記事に効果的に使われたが、その反響は……？

岡本は佐賀日報呼子支局の新任支局長として赴任したところだから、『世界で一番美しい夜』の水野と同じように功を焦ったのかもしれない。すなわち、この記事によって、やっと町の人々の記憶から忘れ去られようとしていた4年前のあの事件のうわさが蒸し返されたため、芳枝は魚市場から休みを出され、釣り船からも締め出されることに……。岡本の妹でツヨシの担任教師である洋子（吹石一恵）も、そんな心ない兄のやり方に怒ったが、岡本がそんな記事を書いたのは、逃亡犯がこの感動的な記事を読めば、子供会いたさに出頭してくるかもしれないというジャーナリスト魂から出たもの。したがって、岡本は当初、なぜ芳枝や洋子がそんなに怒るのか理解できな

ったようだが……。

🎬 「記者魂」 vs. 「刑事魂」

日本では近時記者クラブ制が定着したため、与えられた情報をそのまま記事にして垂れ流す新聞記者が増えてきたが、少なくとも岡本はそうではなさそう。同じように、刑事だって「現場百回」を実践したり、私生活を犠牲にしてまで犯人逮捕に執念を燃やす刑事魂を持った刑事は激減し、今や絶滅品種……？

しかし、この映画に登場する安藤刑事（宇崎竜童）は例外のようで、地方都市（田舎？）にはまだこんな刑事魂を持った刑事が生き残っているらしい。もっとも、今なおそんな刑事につきまとわれている芳枝は迷惑千万で、その密着捜査ぶりは、プライバシー侵害で訴えることができそうなくらい……？ 他方、「この道40年」というベテラン刑事安藤がここまで修治の逮捕に執念を燃やしているのは、同時に彼が熱い人情を持っていることを示すもの……？

この映画では、岡本の記者魂とともに、安藤刑事の刑事魂が大きなポイントだから、宇崎竜童の静かな熱演にみる人情の機微をじっくりと……。

🎬 この女の微妙な距離感は……？

ひととおり物語の筋が見えたところで、舞台は突然博多に移動する。まさかこんな大都会の中に修治が紛れ込んでいるの？ と思っていると、案の定修治は日雇い人夫としてある工事現場で働いている様子。

帽子を深く被って顔を隠しながら、彼はいつもの(?)屋台でラーメンを注文したが、その背後にはおしゃべりに花を咲かす3人の女がいた。博多女は酒が強いと見えて、そのうちの1人清水聡美（高橋ひとみ）は、ぐでぐでぐでん状態ながら友人に別れを告げて自転車に乗ることに。そして聡美は、なぜか公園のブランコに座り1人酒を飲んでいる修治の隣りへ……。こりゃきつと、その背中に男の孤独と哀愁を漂わせている修治に惹かれたため……？ 「私にもお酒を1本」と言って、少し雑談を交わした後、聡美は「じゃあ、私は帰るワ」と別れを告げて自転車に乗ったものの、ひっくり返ってしまったから仕方なく……？

男と女の出会いやその後の展開は全く予測がつかないものだが、聡美の登場はまさにそれ。聡美は病院に勤めている看護師だが、どうも亭主運が悪いらしい。そんな聡

美の修治に対する距離感は……？ もちろん、聡美は最初からある程度修治を意識して近づいていったのだが、聡美は修治との絡みで、今後どんな役割を果たしていくのだろうか……？ それはあなた自身の目で……。

聡美の狙いは？ 岡本の狙いは？

工藤夕貴が『戦争と青春』（91年）以来17年ぶりに日本映画への主演を決めたのは、きっと『春よこい』の人間ドラマ性に惹かれたため。芳枝が、一方で生計を支えるための仕事に男並みに取り組みながら、他方で「父ちゃんはいない」と子供を諭しながら、立派に母親役を果たしているのは、いつかきっと修治が帰ってきてくれると信じているから。しかし、仕事を失った弱みにつけ込んで色気狙いで迫ってきた組合長のやり方には悔しさいっぱい。そんなうっぶんの捌けどころを容易に見つけることができない、芳枝を演ずる工藤夕貴の雨の中の熱演に注目！

そんな芳枝の思いを今やっと理解し、あの記事を書いたのがまちが이었다と気づいた岡本が、今狙っていることは……？ そして同時に、博多から芳枝の家に電話をかけてきた聡美が狙っていることは……？

よくぞここまで！ これぞ自己責任！

松本清張の『点と線』は時刻表を使ったトリックが最大の売りモノの傑作ミステリーだが、『春よこい』でも、西唐津駅を舞台としたスリリングな攻防戦（？）が展開される。それは、岡本が安藤刑事らをまくための「陽動作戦」だが、岡本はなぜそんな行動を……？ それはひとえに、修治を芳枝とツヨシに会わせるため。さて、その道40年のベテラン刑事を相手に、岡本支局長が仕掛けた一世一代の陽動作戦はどんな展開に……？

もちろん、今や修治も自分の罪を償うために自首する決意を固めているはずだが、警察は義理人情で動く組織でないことは当然。さらに、岡本の行動は明らかに犯人隠匿罪……？ 岡本の行動を見ていると、「よくぞここまで！」と感心させられるが、ここまで自己責任を貫いた行動をとるのはホントに大変……。

父と子を結ぶ小道具は、風車

映画は人間ドラマを描くものが多いが、人間の顔や会話ばかりスクリーンに登場し

ているとしんどい面も。そこで、時には抽象的な風景を見せたり、何かの小道具で何かを象徴的にアピールする工夫も必要。つまり、絵画でいえば写実派や印象派だけではしんどく、抽象派も必要だということ……？

この映画の売りの1つは海に面した唐津市呼子町の美しい風景だが、父子の結びつきを象徴する小道具が風車。今ドキ都会では風車など見たことないが、道路を隔ててすぐ海に面した2階建ての芳枝の家には、家族の絆を象徴するような風車が回っていた。しかし、修治が逃亡者となった後は、その手入れをする者がいないから錆びつき、動かないままとなっていた。さて、そんな風車が再び回り始めるのはいつ……？

ツヨシは帰ってきた「父ちゃん」が直してくれたおかげで回り始めた風車に大喜びだったが、翌朝の「釣りに連れて行ってやる」との約束の履行は……？ 父と子の結びつきと絆の強さを象徴する、この小さな風車にも注目を……。

2008(平成20)年5月21日記

ミニコラム

春よこい！ 阪神Tファンの目から

08年10月20日 CS (クライマックスシリーズ) 第1ステージで絶対的守護神藤川球児が中日の4番タイロン・ウッズに2ランホームランを打たれたことで、今年の阪神タイガースはジ・エンド。5年間続いた岡田彰布監督は退陣し、真弓明信氏が新監督に就任した。「春よこい！」今そう叫びたいのは、きっとTファンの面々だろう。

昨年とうって変わった先発投手陣の踏ん張りへと広島から移籍した3番新井の勝負強いチームバッティングによって、春先の阪神は快進撃。他方、主力選手の故障に泣いた巨人は開幕5連敗

とひどい出来で、最大13ゲーム差は完全に阪神の楽勝ムードだった。ところが北京五輪後、新井の故障によって状況は一変し、貧打阪神に逆戻り。逆に巨人は北京五輪で韓国に優勝をもたらした大砲李承燁イ・スンヨブの自信を回復した大活躍によってたちまちゲーム差をゼロとし、10/10決戦で遂にメークレジェンドを。「星野さん、そりゃないよ！」と憤ったトラキチは多いはずだ。

春よこい！ 今さらそう叫んでも詮なきことだが、この虚しさを誰にどうぶつければいいの？

2008(平成20)年10月24日記